

## 馮至の「素朴」について



佐藤普美子

1993年 2月22日、詩人馮至は87歳で亡くなった。幾つかの追悼文はいずれもその人柄を「謙虚謹慎」「平易近人」「待人寛厚」「対己厳格」という言葉で称え、かつて二度にわたり、外国文学研究所が馮至の文学活動（65周年、70周年）を記念する祝賀行事を企画した時、彼がそれをきっぱり断ったことなど、その性格をよく物語るエピソードを二、三挙げている。馮至のこうした謙虚で誠実な人となりと対人姿勢の根底にあるのは、終生変わることのなかった並外れて内省的な姿勢であると思う。

詩人というのは多かれ少なかれ内省的傾向をもつものだろうが、馮至の場合はそれが「素朴」という態度につながっていることが際立っている。彼が中学時代の友人を追想した散文「記陳展雲」（原載1986年10月24、25日《北京晩報》、『立斜陽集』所収）の中で、次のようなことを告白している。

中学では毎週一時間の“手工”科があり、精巧にできたものは選ばれて陳列室に飾られていた。ある時、馮至は鍵の掛かかっていない陳列室にそっと入って行って作品を見ているうちに、その中でとりわけ良くできたものが欲しくなり、それをついポケットに入れて持ち出してしまう。数日後、疚しさに耐えられず友人の陳展雲に打ち明けたところ、返すべきだと諭される。そして彼に付き添われ陳列室の前で“望風”をしてもらい、結局、他の誰にも知られず元の所に戻したという話である。もちろん馮至は、若い頃のささやかとはいえ、いわば窃盗にあたる行為を懺悔するためにこれを書いたのではない。後に天文の仕事についた（一般的には無名の）友人陳展雲の、寡黙だが濃やかな友情についての思い出を語るための一つの材料としたのだ。それにしても、思い出なら他にもあっただろうに、何もわざわざかつての自分の不名誉な行為をさらす必要もなかろうに、とつい考えてしまう。だが、違ふのだ。そもそも友人関係を見つめ直し、率直に語ろうとすれば、自分の弱さや欠点に触れずにすまされるわけではないのだ。そして、追想文の類で、我々が心を打たれるのも、口を極めた賛辞や客観的態度を装う冷静な評価ではなく、むしろ友人が語る、取り繕わない事実の淡々とした告白なのである。そうい

例えば、馮至が友人を追想する時は、大抵、当時の自分の甘さや弱さとの関連において、相手の存在がどう必要だったかを述べている。その言葉には空虚に飾り立てたり、美化した感情表現はまず見られない。

馮至の人と作品に対してしばしばいわれる評語「素朴」の本質は、こういう点にこそ認められてよいのではないか。ただ「素朴」という言葉はしばしば一面的になるのを免れない。しかし、例えば中野重治に「素樸ということ」（『新潮』1928年10月）という印象的なエッセイがあるが、そこでいうところの「<中身のつまっている>感じ」であり、「中身のつまりかたがじつにかっちりとしていて、そのためにあえて包装を必要としない」ことが「素朴」だとするならば、馮至の文学のスタイルはまさに「素朴」とよべるものだと思う。同時に、それは内省的姿勢によって形成されていった彼の人間としての資質でもあるにちがいない。

さて、私が馮至の詩に最も強く感じるのは、その官能性である。これは「素朴」という言葉の陰で、案外見逃されがちな点でもある。思うに、外界に対する受けとめかたが、本質において官能的でありながら、ある種のストイシズムに支えられて、現れとしてひたすら静謐を湛える点（形式が深く関わっている）は、彼の詩の魅力の一つである。1920年代の代表作「我的寂寞是一条長蛇，／冰冷地没有言語——」で始まる「蛇」（1926）はその典型的なものだろう。この詩が喚起する種々の対比——「体性」感覚でいえば、光と闇、乾と湿、白濁と鮮明、むき出しになったものと隠蔽されたもの、そして、狂熱と冷静、恐懦と矜持、無意識と意識、官能と理知、そして全体に漂うエロチシズムとストイシズムの拮抗から醸し出される一種の静寂……。詩の“tension”はここから生じている（が、この詩の放つ強烈な官能性とエロチシズムについてはなぜかあまり言われたことがない）。ここには馮至の「素朴」が内包する濃密な抒情がある。

蛇のイメージは同時代のフランスの詩人、P・ヴァレリーの長詩「若きパルク」（1917）を思い起こさせる。それは近代的自我を意識的に捉えるべく、延々と五百行余りにもわたり知的構成の下に展開された有韻詩で、その中にたびたび現れる蛇のイメージ——「心に棲みついた蛇」は欲望ないし自我の象徴である。複雑に重なり合い変容する自意識の表現の圧倒的量感と知的重厚さは、さながら完成された交響楽のようで、馮至のわずか十二行の抒情詩がとうてい及ぶべくもない。しかし、その素朴で可憐な表現に、青年の自意

識と官能の永遠性を託した「蛇」もまた、忘れられない一つの旋律のように我々の心を捉えるのも確かだ。内省的姿勢、官能性は馮至の「素朴」を語るのに欠くことのできないものだと私は思う。

\*

\*

\*

今、私はこの十年余りの間に馮至から受け取った数十通の手紙の中の様々な真摯な言葉と共に、初めて彼に会った時の印象を思い起こしている。それはちょうど十年前の夏、北京永安南里の自宅に伺った時のことだ。戸口に出迎えてくれた彼は、一人の青年詩人のように、静かで不思議な緊張に満ちた空気を放っていて、どこか内気な「青年」特有の繊細さを感じさせた。私はすでに写真から、穏やかな笑みを浮かべて年長者の風格と余裕をみせる老詩人の姿を勝手に思い描いていた。しかし、目の前に現れた詩人は、微笑んではいたが、意外にも「憂いを隠せない」「青年」のようであった。その日二時間余り書斎で話をしたが、やはりその印象は変わらなかったし、その後も変わることはなかったといえる。彼は私の用意した質問に一つ一つ丁寧に答えてくれた。だが、彼が決して饒舌ではなかったことに加え、私の貧しい語学力のためにしばしば沈黙が生じる。その時だ。我ながら情ない中国語に、消え入りたい程の恥ずかしさと申し訳なさを感じながらも、一方で私は、対等に向き合ってくれる彼の深く優しいまなざしを捉えたように思う。

それは、相手との遥かな距離を認めた上での寛容ではなく、むしろ内向的な人間が相手の存在に全身で耳をそばだてている息遣いのようなものだった。その時私は不謹慎(?)にも、ある種のときめきを感じたことを覚えている。当時は、私自身の彼の作品に対する思い入れの強さのためだと思っていたが、今考えればそれだけではなく、やはり生身の馮至が発した魅力のせいだったのだ。彼は恐らく、初めて会う人間には、まずあの様に全身(の感覚)で向き合い、黙って相手を感じようとするのではないか。その研ぎ澄まされた諸感覚のはりめぐらされた全身を以て、じっと相対してしまうのではないか。しかもあるタイプの「青年」特有の多少の不安とためらいと羞恥を抱きながら。そうしたパトスの在りかたをかいま見た気がして、私は馮至の「身体」を感じ、魅かれたのだと思う。そして私が、当時78歳を迎えようとしていた彼に「青年」を見たのも、今にして思えば、みずみずしくいつまでも老いる

ことのないパトスの存在を認めただけなのだ。

1986年、馮至が白内障の手術のため入院した時の作品「在病院裏之一」（《詩刊》1987年第3期）を読むと切なくなる。今年の初め、入院していた時も同じように感じていたのだろうか。パトスの強い人ほど肉体と精神の齟齬を意識しなくてはならないことが、ひしひしと伝わってくるのだ。

在病院里，／听街道上公共汽车行驶的声音，／我多么想望／能够在人群中间——／尝一尝等车时焦急的心情，／尝一尝车来了争先恐后紧张的情景，／尝一尝到站下车后一瞬间的轻松。

等待、紧张、轻松，有多么多生命的意义啊，／我都不能参与。／听街道上公共汽车行驶的声音，／我望梅不能止渴，／画饼不能充饥。

馮至は生涯詩人であり続けたという意味において、稀有な存在であると思う。だが、常に「今」を深く受けとめ、日々の用をもくもくと果たし続けた生活者でもあった。家族と友人と名もない人々を愛し、そして平凡で目立たない言葉をいつくしんだ。日常的レベルのありふれた言葉、例えば「等待」という言葉に、彼は幾つかの詩篇によってどれ程の新しい生命を吹き込み、輝きを与えたことだろう。また「擁抱」という言葉の中に、一人の人間の過去から未来にわたる時間の凝結と、永遠の一つになれない個の存在の抜き難い悲しみが含まれていることにも彼は気付かせてくれた。まず認識があって詩の言葉に託されるのではなく、詩の言葉が認識になるというのはこういうことなのかもしれない。

馮至の詩の「素朴」な言葉に出会い、共振した瞬間の“永遠”を、私はいつまでも忘れることができない。

灵魂变为飞鸟的眼睛

诗篇化成行人的生命

（挽联）

（1993. 12. 30）